

平成 29 年度「食と農のミライ」作文コンテスト
＜社会人の部＞
審査員特別賞

食を支える若者

娘が大学に進学した、偏差値的には 60 を超える学校で、親としても安心していった。後期になると学校へ行かなくなり学校からも連絡があった。娘の希望は生き物に関する仕事で、現在の大学の勉強が無に感じているようであった。その後、農業大学校へ進学し畜産科の学生として寮生活をしている。座学と実習の生活は生き物と係る時間が多く、土日も当番として牛の世話をしているようである。農耕車の免許・フォークリフトの免許なども取ったようで、あっという間に半年が経ち 8 月後半からは畜産農家の実習先にて 28 日間お世話になっている。家に帰ってくると、教科書では教えてもらえない牛の見分け方や、搾乳できなくなった牛の処置など、50 年も飼育している方から秘伝を教わったと喜んでいった。ペットと飼育し食料になる動物の関わり方の違い、愛情を持って接触するが経営も同時に考えることの難しさなど、話を聞いているうちに思慮深さに感心するとともに成長を感じた。先日は同じ学校できゅうりの栽培研究をしている先輩からきゅうりをいただいた。卒論テーマだそうである。普段スーパーで購入して食べているものが、若者たちに熱心に研究されていることに、未来の食を保証されているように思えありがたく感じた。食を支えるのはやはり人であり、その人を育てることが農業の未来をつくる最良の手段である。農業に関わろうとしている若者が、専門の学校で育成され、地元の農業の原動力として活性化に大いに役に立つものと確信できる。そして、何より若者一人一人の農業人生に幸せがあることを望む。親としての願いである。